**ラシーヌ関係文献目録**

**戸口民也**

情報更新 2012年8月23日

**邦語文献**

**１．テキスト**

『ラシーヌ戯曲全集Ⅰ・Ⅱ』伊吹武彦・佐藤朔編集、人文書院、1964－65年。

第１巻：

ラ・テバイード（鬼頭哲人訳）

アレクサンドル大王（福井芳男訳）

アンドロマック（渡辺守章訳）

裁判きちがい（川俣晃自訳）

ブリタニキュス（安堂信也訳）

ベレニス（伊吹武彦訳）

第２巻

バジャゼ（鬼頭哲人訳）

ミトリダート（田中敬次郎訳）

イフィジェニー（川口篤訳）

フェードル（伊吹武彦訳）

エステル（戸張智雄訳）

アタリー（佐藤朔訳）

『ラシーヌ』鈴木力衛編、筑摩書房（世界古典文学全集48）、1965年。

ラ・テバイッド（渡辺清子訳）

アレクサンドル大王（大島利治訳）

アンドロマック（安堂信也訳）

裁判きちがい（鈴木力衛・鈴木康司訳）

ブリタニキュス（渡辺守章訳）

ベレニス（戸張智雄・戸張規子訳）

バジャゼ（安堂信也訳）

ミトリダート（渡辺守章訳）

イフィジェニー（戸張智雄・戸張規子訳）

フェードル（二宮フサ訳）

エステル（福井芳男訳）

アタリー（渡辺義愛訳）

『ラシーヌ戯曲全集Ⅱ』渡辺守章訳、白水社、1979年。

ブリタニキュス

ベレニス

バジャゼ

ミトリダート

（IIのみ刊行）

『世界文学全集 11 　コルネイユ　ラシーヌ　モリエール』講談社、1978年。

アンドロマック（戸張規子訳）

ベレニス（戸張規子訳）

イフィジェニー（戸張規子訳）

フェードル（戸張智雄訳）

『ラシーヌ劇集1』原光訳、私家版（サボテン叢書）、1989年。

『フェードル／アンドロマック」渡辺守章訳、岩波書店（岩波文庫）、1993年。

『ブリタニキュス／ベレニス』渡辺守章訳、岩波書店（岩波文庫）、2008年。

『ポール＝ロワイヤル略史』金光仁三郎訳、審美社、1989年。

「一キリスト教徒の嘆き、自身の内に感じる対立について／今世紀の人々の心を占める空しい事について」安藤俊次訳、『フランス詩大系』窪田般弥責任編集、青土社、1984年、pp. 244－246。

**２．参考文献**

アウエルバッハ（E．）「偽信者」「中断された晩餐」、『ミメーシス・下』篠田一士・川村二郎訳、筑摩書房（筑摩叢書）、1967年、pp. 112－186。

朝比奈誼「ラシーヌの文学 ―― 情念と＜隠れた神＞」、饗庭孝男・朝比奈誼・加藤民男編『フランス＜知＞の新しい地平から』有斐閣、1984年、pp. 107－119。

アダン（アントワーヌ）「ラシーヌの悲劇」、『フランス古典劇』今野一雄訳、白水社（文庫クセジュ）、1971年、pp. 81－110。

アポストリデス（ジャン＝マリー）『機械としての王』水林章訳、みすず書房、1996年。

アポストリデス（J.-M.）『犠牲に供された君主：ルイ14世治下の演劇と政治』矢橋透訳、平凡社、1997年。

綾部友治郎「ラシーヌの情念」、『玉川学園創立50年記念論文集1』玉川学園大学、1980年、pp. 1－22。

アリエス（フィリップ）「生と死への態度 ―― ラシーヌにみる17世紀の受胎率」、『「教育」の誕生』中内敏夫・森田伸子訳、藤原書店、1992年、pp. 70－73。

伊地智均「十七世紀フランス古典悲劇と近松劇における悲劇性の研究」、『17世紀日本の比較文化論的研究』（昭和58年度科学研究費補助金一般研究B研究成果報告書）、東北大学、1984年、pp. 46－49。

伊藤洋「ラシーヌと純粋透明な悲劇」、『フランス演劇史概説』（新装版）、早稲田大学出版部、1995年、pp. 86－93。

ヴァレリー（ポール）「女性フェードルについて」二宮フサ訳、『ヴァレリー全集8』、筑摩書房、1967年。

エイベル（ライオネル）「アタリヤの宿命 ―― そしてラシーヌ」高橋康也・大橋洋一訳、『メタシアター』朝日出版社、1980年、pp. 34－86。

小倉博孝「南仏ユゼスのジャン・ラシーヌ」、田辺保編『フランス　わが愛』青山社、2000年、pp. 31－50。

小田桐光隆編『ラシーヌ劇の神話力』Sophia University Press上智大学、2001年。

小場瀬卓三「古典主義 ―― モリエール、ラシーヌ、ラ・フォンテーヌ、ボワロー、貴族作家」、『フランス・レアリスム研究序説』世界評論社、1950年、pp. 74－163。

小場瀬卓三「『ブリタニキュス』小論」、『演劇鶏肋集』未来社、1963年、pp. 204－224。

小場瀬卓三『バロックと古典主義、17世紀フランス文学の諸問題』白水社、1978年。

金光仁三郎『ラシーヌの悲劇』中央大学出版部、1988年。

鬼頭哲人「ジロドゥの『ラシーヌ論』」、『佐藤朔教授還暦記念論文集』慶大芸文学会、1967年、pp. 25－30。

グラック（ジュリアン）「『バジャゼ』について」、『偏愛の文学』中島昭和訳、白水社（白水叢書）、1978年、pp. 189－212。

グレトゥイゼン（ベルンハルト）「ラシーヌとコルネイユ」、『フランス革命の哲学』井上尭裕訳、法政大学出版局（りぶらりあ選書）、1977年、pp. 11－13。

桑原武夫『桑原武夫集1（1930－45）』岩波書店、1980年、（「ラシーヌへの道」p．257－276、「芸術家の実生活と作品」pp. 399－410）。

ゴルドマン（リュシアン）『隠れたる神 ―― パスカルの「パンセ」とラシーヌ劇における悲劇的世界観の研究』上下、山形頼洋・名田丈夫訳、社会思想社（社会思想叢書）、1972－73年。

サント＝ブーヴ「ラシーヌ論 ―― 『ポール・ロワイヤル』第6巻第11章より」支倉崇晴訳『世界批評大系1 ―― 近代批評の成立』筑摩書房、1974年、pp. 199－224。

篠沢秀夫「テクスト研究 ―― ラシーヌ『フェードル』」、『篠沢フランス文学講義1』大修館書店、1979年、pp. 406－412。

篠田浩一郎「幽閉された人びと ―― Homo Racinianus」、『ロラン・バルト ―― 世界の解読』岩波書店、1989年、pp. 81－97。

シャンピオン（ピエール）「ジャン・ラシーヌの家」有田英也訳、『わが懐かしき街』図書出版社、1992年、pp. 206－238。

白井浩司「ギユマンのラシーヌ論」、『純粋観客 ―― 現代フランス文学拾遺』大光社、1970年、pp. 225－230。

ジロドゥ（ジャン）「ラシーヌ論」岩瀬孝訳、岩瀬孝『古典劇と前衛劇 ―― フランスと日本』朝文社、1991年、pp. 268－319。

杉捷夫「ラシーヌの悲劇と三単一の規則」、『フランス文学論』酣燈社、1947年、pp. 58－68。

鈴木康司「ジャン・ラシーヌ『ベレニス』」、『スタンダード・フランス語講座（8）文学鑑賞』大修館書店、1972年、pp. 164－169。

スタロバンスキー（ジャン）「ラシーヌと視線の詩学」、『活きた眼』大浜甫訳、1971年、pp. 87－112。

スタンダール「ラシーヌとシェイクスピア」島田尚一・西川長夫訳、『スタンダール全集10 ―― 文学論集』桑原武夫・生島遼一編集、人文書院、1973年、pp. 1－164。

ストレイチー（リットン）「ラシーヌ」小佐井伸二訳、『世界批評大系2 ―― 詩の原理』筑摩書房、1974年、pp. 265－282。

ソーニエ（V.-L.）「ラシーヌ」、『改訳17世紀フランス文学』小林善彦訳、白水社（文庫クセジュ）、1965年、pp. 113－118。

高沖陽造「ラシーヌの宮廷文学」、『世界文学 ―― ダンテからジイドまで』評論社、1949年、pp. 88－96。

高橋安光「文人たちの旅 ―― 古典主義時代に入って」、『旅・戦争・サロン　啓蒙思想の底流と源泉』法政大学出版局、1991年、pp. 44－48。

田中敬次郎『ラシーヌ研究』社会思想社（社会思想叢書）、1972年。

田村真理「言語行為としての神託 ―― 『イフィジェニー』をめぐって」、『フランス文学と芸術における自然と人間の発見』泉敏夫編著、行路社、1990年、pp. 21－36。

ドゥコー（アラン）「ラシーヌをめぐる二人の女優」、『フランス女性の歴史2 ―― 君臨する女たち』柳谷巌訳、大修館書店、1980年、pp. 36－39。

戸張智雄『ラシーヌとギリシア悲劇』東京大学出版会、1967年。

戸張規子『ブルボン家の落日 ―― ヴェルサイユの憂愁』人文書院、1991年、（「悲劇作家ラシーヌ」pp. 142－149、「ラシーヌの裏切り」pp. 150－154、「悲劇女優の誕生、デュ・パルク嬢、ラ・シヤンメレ嬢」pp. 154－158）。

戸張規子『フランス悲劇女優の誕生』人文書院、1998年。

ドムナック（ジャン＝マリー）、『悲劇への回帰』岩瀬孝訳、中央公論社、人文書院、1987年。

中村雄二郎「崇高なる人間ぎらいたち」、『思想の歴史10 ―― ニーチェからサルトルへ』清水幾太郎編、平凡社、1966年、pp. 23－47。

ニデール（アラン）『ラシーヌと古典悲劇』今野一夫訳、白水社（文庫クセジュ）、1982年。

ノーマンド（バーリン）「情念 ―― 『ヒッポリュトス』『フェードル』『楡の木陰の欲望』」、『悲劇、その謎』長田光展・堤和子・若山浩訳、新水社、1987年、pp. 102－119。

バルト（ロラン）「ラシーヌはラシーヌだ」、『神話作用』篠沢秀夫訳、現代思潮社、1967年、pp. 80－82。

バルト（ロラン）『ラシーヌ論』渡邊守章訳、みすず書房、2006年。

ブランシェ（A.）「太陽と夜のあいだのフェードル」、『文学と霊なるもの ―― 火の夜』田辺保・原田武訳、思潮社、1972年、pp. 87－123。

ブランショ（モーリス）「『フェードル』の神話」、『踏みはずし』神戸仁彦訳、村松音館、1978年、pp. 91－98。

プーレ（ジョルジュ）「ラシーヌ的時間覚え書」二宮フサ他訳、『人間的時間の研究』筑摩書房（筑摩叢書）、1969年、pp. 142－158。

ペイル（アンリ）「情熱の悲劇 ―― ラシーヌの『フェードル』」、クリアンス・ブルックス編『悲劇の系譜 ―― ソポクレスからエリオットまで』大場建治・赤川裕訳、至誠堂、1968年、pp. 95－128。

ベガン（アルベール）「夜のフェードル」、『現存の詩』小浜俊郎・後藤信幸・山口佳己訳、国文社、1975年、pp. 103－110。

ベニシュー（ポール）「ラシーヌ」、『偉大な世紀のモラル ―― フランス古典主義文学における英雄的世界像とその解体』朝倉剛・羽賀賢二訳、法政大学出版局（ウニベルシタス叢書）、1993年、pp. 164－201。

真下弘子「ラシーヌの演劇神学 ―― 『イフィジェニー』の場合」、『友情の微笑み ―― 山崎庸一郎古希記念』みすず書房、2000年。

三島由紀夫「芸術断想」、『三島由紀夫全集31　評論7』新潮社、1975年、pp. 47－120。

三島由紀夫『三島由紀夫評論全集3』（田中美代子解題）新潮社、1989年、（「『ブリタニキュスのこと』」pp. 690－691、「ラシイヌの季節来る」p.726、「異国趣味について」p. 728、「『ブリタニキュス』修辞の弁」pp. 758－759、「修辞者あとがき」pp．763－766、「『芙蓉露大内実記』について」pp. 873－874．）

三島由紀夫「舞台のさまざま」、『三島由紀夫評論全集4』（田中美代子解題）新潮社、1989年、pp. 15－19。

モリアク（F.）「ジャン・ラシーヌ伝」田中敬次郎訳、田中敬次郎『ラシーヌ研究』社会思想社（社会思想叢書）、1972年、pp. 3－126。

矢代静一「フランス古典劇 ―― ラシーヌ『ブリタニキュス』」、『現代の演劇1』千田是也・田中千禾夫監修、三笠書房、1965年、pp. 124－131。

矢橋透「はじめに、噂＝ノイズがあった… ―― ラシーヌ『フェードル』における登場人物の「感覚の不確実さ」 ―― 」、『劇場としての世界 ―― フランス古典主義演劇再考』、水声社、1996年、pp. 255－282。

山中知子『ラシーヌ、二つの顔』人文書院、2005年。

山中知子「ラシーヌ『フェードル』 ―― 母と息子」、上村くにこ・西川祐子編『フランス文学／男と女と』勁草書房、1991年、pp. 39－59。

吉江喬松「仏蘭西古典悲劇研究－ラスイヌの悲劇」（『吉江喬松全集第一巻』所収）白水社、1941年。

リピエッツ（アラン）『なぜ男は女を怖れるのか ―― ラシーヌ「フェードル」の罪の検証』千石玲子訳、藤原書店、2007年。

ルージュモン（ドニ・ド）『愛について ―― エロスとアガペ』鈴木健郎・川村克己訳、岩波書店、1959年、（「ラシーヌあるいは鎖をはなたれた神話」鈴木健郎訳、pp. 298－300、「『フェードル』あるいは罰をうけた神話」鈴木健郎訳、pp. 301－305）。

ルーセ（ジャン）「ラシーヌ」、『フランスバロック期の文学』神沢栄三訳、筑摩書房、1970年、pp. 371－374。

ロオラン（ロメン）「古典悲劇（ラシイヌとコルネエユ）」大杉栄訳、『民衆芸術論』（長谷川泉解説）、日本図書センター、近代文芸評論叢16、1992年、pp. 14－25。

渡邊守章「ラシーヌと演劇」、『フランス文学講座（4）演劇』大修館書店、1977年、pp. 180－229。

渡邊守章「修辞学炎上」、『虚構の身体』中央公論社、1978年、pp. 302－307。

渡邊守章「ラシーヌ悲劇の構造」、『虚構の身体』中央公論社、1978年、pp. 284－301。

渡邊守章編著『「フェードル」の軌跡』新書館、1988年。

渡邊守章「＜火＞の神話学」、『演劇とは何か』講談社、1990年、pp. 59－67。

渡邊守章「古典主義の頂点 ―― ラシーヌ悲劇」、『フランスの文学 ―― 17世紀から現代まで』放送大学教育振興会（放送大学教材）、1998年、pp. 79－99。